

る。大徳哭を詠ひて歌を作りて曰はく「からすといふおほをそどりのことをのみともに
といひてききだちいぬる」とのたまふ。夫れ火を炬さむとする時はまづ蘭しき松を
備け、雨降らむとする時は兼ねて石板潤ふ。鳥の鄙なる事を示て領道の心を発
す。まづ善き方便をもちて苦を見し道を悟らしむといふは、其れ斯れを謂ふな
り。欲界の雑の類は、鄙なる行是くの如し。歌ふ者は背き、愚なる者は負る。
賛に曰はく「可きかな、血沼原主氏、鳥の邪姪を敵て俗塵を厭ひ、浮花の仮
なることを背きて常浄に趣く。身は修善を勤めて惠命を祈ひ、心は安養を期り
て解脱を期す。是れ世間の異秀に土を厭ふ者なり」といふ。

悪逆なる子妻を愛ひ母を殺さむことを謀りて現報に恵
しき死を被る縁 第三

吉志火麻呂は、武蔵国多摩郡鴨里の人なり。火麻呂の母は、早部真留なり。
聖武天皇の御世に、火麻呂、大伴名姓分卿ならず筑紫の前守に点されて三年
を経べくあり。母子に随ひて往きて相け軒養ふ。其の婦は国に留り家を守る。
時に火麻呂己が妻を離れ去り、妻を愛ぶることに昇へずして、逆ふる謀を発

して思はく「我が母を殺し、其の喪に遭ひて服し、役を免れて還り、妻と俱
に居む」とおもふ。母の自性、善を行ふことを心とす。子母に語りて言はく
「東の方の山の中に、七日法花経を説き奉る大なる会有り。率、母聞け」と
いふ。母歎かれ、経を聞かむと念ひて心を発し、湯を洗み身を浄め、俱に山
中に至る。子牛の目を以ちて母を眺みて言はく「汝、地に長跪け」といふ。母
子の面を瞻りて答へて曰はく「何故ぞ然言ふ。もし汝鬼託くや」といふ。子
横刀を抜き、母の頸を殺らむとす。母すなはち子の前に長跪きて言はく「木を
殖うる志は、彼の真を得並に其の影に隠れむが為なり。子を養ふ志は、子の
力を得并に子に養はれむが為なり。恃める樹の雨漏る如く、何すれぞ吾が子
思に違ひ、今異ふ心在る」といふ。子遂に聴かず。時に母佐際びて、身に著た
る衣を脱きて三処に置き、子の前に長跪きて遺言して言はく「我れを誂はむ裏
にせよ。一の衣を以ちては、我が兄男汝得よ。一の衣は、我が中男に贈り賜
へ。一の衣は、我が弟男に贈り賜へ」といふ。逆ふる子歩み前みて母の頸を
殺らむとする頃に、地裂けて陥る。母すなはち起ちて前み、陥る子の髪を抱き、
天を仰ぎて哭きて願はくは「吾が子は、物託きて事をす。実の現心にあらず。
願はくは罪を免し賜へ」とねがふ。なほ髪を取り子を留む。子終に陥る。慈母

花。水泡の美的表現か。ハ涅槃の徳である常、
淨、を示して涅槃をあらわす。浮花のような仮
の世を去つて涅槃の世界に行く。二〇仏の智慧。
二一阿陀陀仏の国土。一極楽とは異訳の關係に
ある。

第三縁 今昔物語集・二十ノ三十三に書承。
二善老律では、八虐のひとつ。相父母、父母、
に対しては殺つこと、殺さうと謀ること。伯叔
父、姑、兄姉、外祖父母、夫、夫の父母、に対
しては殺すこと。三米詳。本説話以外に所伝
をみない。四多摩郡は東京都。鴨里は所在未
詳。五米詳。本説話以外に所伝をみない。
六中巻九縁の大伴赤麻呂の一族か。一七防人。
八兵士とすることを点とつた例は、軍防
令にみえ、万葉集・二十巻三に「佐佐母里爾佐
領」とある。二八上番の期間は防人は三年、た
だし往復の日数は含めない(軍防令)。三軍防
令では、征行するときに婦女をとまなうこと
は禁じられぬ。本説話のばあい征行にはあた
らぬが、母が子の防人にしなない行くことは他
に例をみない。子の火麻呂に対する母の愛着の
強さがうかがえる。中巻三縁の母に対する子
の愛着の強さに、イメージが結びついている。
三令義解・軍防令によれば、妻妾をとまなう行
くことは許されてはいた。しかし、万葉集十四
二十、所収の防人の歌には故郷に残された妻を
偲ぶものが多い。三原文「不昇」は「不勝」
に同じ。一するごとに堪えられない。三令義
解・軍防令によれば、上番の期間には父母の喪
であつても任務はなされることはできない。火
頭(炊事所)は例外。喪に遭つたという表現は令に
みえる。四地蔵羅什訳の妙法蓮華経には、七
巻に調卷されたものと八巻に調卷されたものと

があつた。後代の法華八講が八巻に調卷された
妙法蓮華経に拠つておこなわれることより推測
すれば、本説話は、七巻に調卷された妙法蓮華
経に拠る講經の法会のことを述べているのであ
らう。三国会図書館本釈釈(率イサ)。万葉
集・三・五三卷三見(三)。人を誘うときに発
する語。「率」をこの意に用いるのは日本におけ
る引伸義。三ききわめて印象的な形容だが、他
に例をみない。牛に關してその目が記述される
こと自体多くない。太平御覽九〇〇所引幽明
録・桓沖の「牛忽熟視」のように、憐憫を乞ふ目
つきか。母に対する微妙な気持ちの表現。
三「長跪」は、仏典語。六原文「託鬼」。下文
に「託物」。「もの」の表記を「鬼」「物」と変化さ
せている。二佩刀。三大般涅槃經・光明遍
照章・寶德王菩薩品に「人師範樹、為得薩婆、
為得花果及以材木」とみえる(攷証補訂)。
三失意のさまをあらわす。火麻呂が翻意しな
いので落胆する。三原文「著身脱衣」。
三わたしのことを使ふかたみの贈り物。
三原文「一衣者、贈我中男」也。「一」は、
本説話では、日本語の補助動詞「なまふ」を表記
するために用いられている。本来は、上位の者
が下位の者に与える意。三下巻四縁の筆が肩
を殺そうとするイメージに結びついている。
三天父の釈迦牟尼仏に対して重衡の心をいだ
いた善星比丘が生きたが地獄に墮ちた説話(大
般涅槃經・迦葉菩薩品)・五逆をおこなつた提婆
達多(五逆とされるが、父母に対する五逆は
知られていない)が生きたが地獄に墮ちた説
話(たとへば増一阿含經・四十七)の、系譜につ
りなる。三雄雉・九・一〇九に、羽けた大
地に陥る子の髪をとらえて助けようとした母の
説話がみえる。本説話と下巻四縁とはともに沈

髪を持ちて家に帰り、子の為に法事を備へ、其の髪を篋に入れ、仏の像の前に置き、謹みて誦誦を請ふ。母の慈深きが故に、惡逆の子に哀愍する心を垂れ、其の為に善を修ふ。誠に知る、不孝の罪の報はなほ近し、惡逆の罪彼の報無きにあらず、と。

力女掬力を試る縁 第四

聖武天皇の御世に、三野国片泉郡小川市に一の力女有り。為人大なり。名けて三野狐と爲ふ。是れ昔三野の狐を母として生れし人の四継の孫なり。力強きこと百人の力に當る。小川市の内に住み、己が力を持ち、往還の商人を凌解けて、其の物を取りて業とす。時に尾張国愛智郡片輪里に一の力女有り。為人少し。是れ昔元興寺に有りし道場法師の孫なり。其れ三野狐の人の物を凌解けて取ると聞き、試むと念ひて、蛤五十斛を埒りて船に載せ、彼の市に泊つ。また備けて熊鷹の縄縫二十段を副納む。時に狐來り、彼の蛤をみな取りて売らしむ。然らうして問ひて言はく「何より来る女ぞ」といふ。蛤の主答へず。また問へども答へず。重ねて四遍問ふ。すなはち答へて言はく「来る方を知らず」といふ。

狐礼無しと念ひ、打たむとして起ち依る。すなはち二手をもちて待ち捉り、葛縄を以ちて一遍打つ。縄に肉著く。また一の縄を取りて一遍打つ。縄に肉著く。十段の縄をもちて、打つに随ひてみな肉著く。狐白して言さく「服はむ。犯せり。惶し」とまうす。是に狐の力に益ることを知る。蛤の主の女言はく「今より已後、此の市に在むこと得され。もし強ひて住まば終に打ち殺さむ」といふ。狐打ち取められて、其の市に住まず。人の物を奪はず。彼の市人惣みな安穩を悦ぶ。夫れ力人の文、世を継ぎて絶えず。誠に知る、先の世に大なる力の因を殖え今に此の力を得たり、と。

漢神の祟に依り牛を殺して祭りまた生を放つ善を修むて現に善と惡との報を得る縁 第五

摂津国東生郡撫田村に、一の富める家長公有り。姓名詳ならず。聖武太上天皇の世に、彼の家長漢神の祟に依りて禱りて祀る。七年を限りて年ごとに殺し祀るに一の牛を以ちてす。合せて七頭を殺し、七年に祭り畢る。忽に重き病を得たり。また七年の間を遑て医薬方をもちて療せどもなほ愈えず。

みゆく人を引きあける描写を含み、イメーシの結びつきがみられる。六、不孝を描く上巻二十三縁に、「天知地知」として、やはり「天」が述べられていた。

一僧を請じて仏事をおこなつたのであらう。

二 中巻三十三縁に、死者の頭を轉宮に納め仏前に置いた、と述べられている。遺体あるいは遺骨の一部分、あるいは遺骨を宮に納めて仏前に安置することが追善の儀式の一部分としておこなわれたか。

三 追善のために、僧に誦經をねがって布施する。

第四縁 上巻三縁、三縁、を承ける記述を含んでいる。今昔物語集・二十三・十七に書承。

四 「掬力」は仏典にみえる語。たとえば大般涅槃經・如來性品。腕力を競う意に限定されない。

五 岐阜市。

六 未詳。下文より推せば皇良川の沿岸に所在。

七 未詳。へ、上巻三縁。この割注によつて本

説話が上巻三縁に結びつけられる。それはまた

上巻三縁が道場法師にかかわる説話に結びつけ

られることでもある。八 玄孫。曾孫の孫の子。

九 二上巻三縁には「是人強力多有とあつた。

十 先相と同じ能力を有することになる。

十一 威圧して打ち負かす。「凌シヘタク」(名義抄)。

十二 国史記書紀本訓撰「解・僧師太社」。

十三 名古里市中区。上巻三縁、中巻二十七縁、

と同じ地。地名表記が異なる。依拠資料の用字

の反映か。一三 大きい者と小さい者とが争い、

小さい者が勝利をなさぬ、というのは口承の

世界に多くみられる説話の型。一四 上巻三縁

この割注によつて本説話が上巻三縁に結びつけ

られる。一五 食用であらう。書紀・景行天皇五

十三年來に白蛤を膳にしているのが蛤を食用に

したのが國での初出例。一六 「斛」は量の単位。

一七 斛は十斗、一斗は十升。上巻三十一縁にみえ

る「石」と同一の量を示す単位である。本書で

「斛」「石」の二つとありがみられるのが度量衡の大

小の割注にかかわるか、あるいは別の理由による

ものかは、各一例という例の少なさから判断と

しない。一八 皇良川を溯航したのであらう。

一九 和名抄に馬鹿草、久米豆、良とみえる植物

は現代でも同じくクマツツラと呼ばれている。

武田祐吉は本説話の「熊鷹」はそれとは別で「大

きな鷹性植物である」とし、諸注は武田説に追

随するが、再考の必要がある。道場法師の孫女

の体格を、武田説はじめ諸注は大きく考えすぎ

ているきらいがある。室町物語の小男の草子

の主人公のように、一尺程度の身長と考えるべき

ではないであらうか。その程度の体格の女の持つ

腰としてクマツツラは不適当とはいえない。上

巻三縁にみえる道場法師も伝説の巨人タイタラ

ボツチとイメーシを重ね合せて理解する説はあ

やまりであらう。道場法師もおそらくは小さい

体格の少年であらう。二〇 しなやかな弾性のあ

る。二一 播磨國風土記・六采郡に(御方)の

里の地名起源説話に「黒鷲三条(はく)」を述べる。

黒鷲(名義抄ではツノヲ)を数える助数詞が

「かたであることがわかる。熊鷹翼の翼も「か

たで数えてよいであらう。二二 師手。万葉集・

三・三三二(二手)」。三 狐の体の肉が削ぎ落さ

れ、骨にその肉が着く。三 原文「服也」(犯也)。

四 中巻二十七縁にも降服する船人のこと

ばとして「犯也」(服也)とみえる。二五 打たれて

鎮められる。「服」は戦いをやめる意。三 仏典

語。たとえば妙法蓮華經にみえる。三 系統。

モ「先世殖大力因」の具体相は示されていない

惡逆子愛妻將殺母謀現報被惡死緣第三

吉志火麻呂者、武藏國多麻郡鴨里人也。火麻呂之母者、早部真君也。聖武天皇御世、火麻呂、大伴名姓不分明、筑紫前守所点、心經三年、母隨子往、而相飢養、其婦者、留國守家、時火麻呂、雖已妻去、不昇妻愛、而究逆謀、思殺我母、遭其喪服、免役而還、与妻俱居、母之自性、行善為心、子語母言、東方山中、七日奉說法花經、有大会、率母聞之、母所欺、念將聞經免心、洗湯淨身、俱至山中、子以牛目、眦母而言、汝地長跪、母瞻子面、而答之曰、何故然言、若汝託鬼耶、子拔橫刀、將殺母頸、母即子前長跪而言、殖木之志、為得彼莫並隱其影、養子之志、為得子力、并披子養、如侍樹漏雨、何吾子違思、今在異心耶、子遂不聽、時母佐僚、著身脫衣、置於三处、子前長跪、遺言而言、為我詠裏、以一衣者、我兄男汝得之也、一衣者、贈我中男、脫也、一衣者、贈我弟男、脫也、逆子步前、將殺母頸之頃、裂地而陷、母即起前、抱陷子髮、仰天哭願、吾子者、託物為事、非實現心、願免罪脫、猶取髮留子、々終陷也、慈母持髮歸家、為子備法事、其髮入宮、置仏像前、謹請諷誦矣、母慈深故、於惡逆子、垂哀愍心、為其修善、誠知、不孝罪報甚近、惡逆之罪、非無彼報矣、

- 1 早一早
- 2 留一留
- 3 飢一節
- 4 子(米國)一ナシ
- 5 而(米國)一ナシ
- 6 母頸(米)一母々
- 7 頸之頃(米)一頃之
- 8 宮一若
- 9 深(米國)一深深
- 10 無(米國)一無無

力女拘力試緣第四

聖武天皇御世、三野國片晨郡小川市、有一力女、為人大也、名為三野狐、是三野國狐為母生之四姊妹也、力強當百人力、住小川市内、恃己力、凌弊於往還商人、而取其物、為業、時尾張國愛智郡片輪里、有一力女、為人少也、是昔有元興寺、遺囑法師之孫也、其聞三野狐凌弊於人物而取、念試之、蛤捕五十斛、載船、泊彼市也、亦儲備副、納熊葛練韃廿段、時狐來、彼蛤皆取令壳、然問之言、自何來女、蛤主不答、亦問不答、重四遍問、乃答之言、來方不知、狐念無礼、打起依、即二手待捉、葛練以一遍打之、韃著肉、亦取一韃、一遍打之、韃著肉、十段韃、隨打皆著肉、狐白之言、服也、犯也、惶也、於是知益於狐之力也、蛤主女言、自今已後、在此市不得、若強住者、終打殺也、狐所打敗、不往其市、不奪人物、彼市人摠皆悅安穩、夫力人文、繼世不絕、誠知、先世殖大力因、今得此力矣、

- 1 小(米國)一少
- 2 一力(米國)一力
- 3 小(米國)一少
- 4 郡(米)一群
- 5 一力(米)一力
- 6 捕(米國)一捕
- 7 斛(米國)一斛
- 8 之(米國)一々
- 9 之(米國)一々
- 10 益(米國)一蓋
- 11 文一多

依漢神崇殺生而祭又修放生善以現得善惡報緣第五

攝津國東生郡撫回村、有一富家長公、姓名未詳也、聖武太上天皇之世、彼家長、依漢神崇、而禱之祀、限于七年、每年殺祀之以一牛、合殺七頭、七年祭畢、忽得重病、又逕七年間、醫藥方療、猶不愈、喚集卜者、而破祈禱、亦弥增病、於茲思之、我得重病、由殺生業故、自臥病年、已來、每月不闕、六節受齋戒、修放生業、見他殺含生之類、不論而贖、又遣八方、訪買生物而放、迄七年頃、臨命終時、語妻子曰、我

- 1 舍(國)一貢
- 2 動(米國)一ナシ
- 3 頃(米)一ナシ